

邪妖都市妖奇譚外伝

妖蟲に身を捧げし蟲宮響子は、全身を蹂躪
されて口から蟲を産み落とす

……蟲使いとして知られる「蟲宮家」の歴史は古い。彼らの系譜は千年以上前まで遡ることができ、元寇後、力を使い果たした邪妖院家が衰退して以降は、彼らに変わって時の為政者たちに仕えてきた。蟲使いとして知られる彼らは、戦闘、防衛、諜報、さらには後方支援にいたるまで、戦いのすべてを彼らが使役する「妖蟲」に委ねることにより、ほぼ無傷のまま栄華を極めてきたと言っても過言ではない。実際、対人にせよ、対魔にせよ、戦いによって傷尽き、力尽き果てるモノは戦いに駆り出された妖蟲たちであって、彼らを使役する蟲宮家の人々が死傷することなどほとんどなかったからだ。

どのような強い人間も、悪鬼・妖魔であっても、数千・数万匹の妖蟲を相手に

して勝つことはほぼ不可能に近い。一〇匹、二〇匹、あるいは一〇〇匹、二〇〇匹を倒し殺すことができたとしても、その周りから、その一〇倍、あるいは一〇〇倍の妖蟲たちに襲われてはひとたまりもないからだ。妖蟲は強い。一匹一匹の力はタカが知れているかもしれないが、それが群れになり、数の暴威を振るうようになれば、どんな強者であっても、内側から外側から肉を食い荒らされ、骨すら残らず喰らい尽くされてしまうからだ。邪妖教団というカルト教団には、蟲邪の称号を持つ蝦夷雄大という強力な蟲使いが在籍しており、彼には教祖に次ぐ地位が与えられている。それは妖蟲を操る者がいかに強力な戦力になりうるかを物語っており、先に述べたように、数千・数万匹の妖蟲を相手にして勝つことはほぼ不可能に近いのであった。

そんな妖蟲たちを使役する蟲宮家の人々は、妖蟲たちの力を借り、彼らを使役することによって、栄華を極め、代々に渡って富み栄えてきたのだった。

むろん、妖蟲を使役するためには、相応の対価を支払わなければならない。そしてそれは、蟲宮家に生を受けた女たちの役目であった。

蟲宮家は古来より、女尊男卑の家系制度を貫いてきた。蟲宮家に生まれた男は、それこそ本家筋の長男であっても、下男のような扱いを受け、女たちに逆らうことができないよう強要されてきた。これにはむろん、理由があつて、一族に富と栄華をもたらす妖蟲を使役することができる者は、蟲宮家に生まれた女性だけ

だったからである。ゆえに、蟲宮家の男たちは、女たちに逆らえばどのような悲惨な末路を辿るか承知していたため、彼女たちに対して卑屈なまでに従順だった。

むろん、男には男の役割があつて、彼らは外から嫁を受け入れ、孕ませ、子孫を残すという、いわば「種男」としての役割を課されていた。そして出来た子どもが女であつた場合は蟲使いとしての道を歩み、男であつた場合は父親と同じく卑屈な人生を送る羽目になるのであつた。

外から迎え入れる血筋は美しい嫁に限られた。これはむろん、幼少期から卑屈な思いをさせられてきた蟲宮家の男たちに対するせめてもの手向けであるのだが、それが結果的に美女の系譜を紡ぎ出すことになり、蟲宮家の女は絶世と称されるに足る美女が多くいた。そのため、他家から求婚されることが後を絶たないのだが、蟲宮家の女が外へ嫁ぐことは決してなかつた。なぜならば、彼女たちは使役する「妖蟲」たちの「占有物」だからである。

共栄共存という言葉があるが、それは蟲宮家にこそ相応しい言葉かも知れない。

蟲宮家の女たちは蟲使いとして妖蟲たちを使うが、妖蟲たちもまた蟲宮家の女を利用してゐるのだ。妖蟲たちは、蟲宮家の女を、自分たちの「苗床」として活用してゐるのであつた。

蟲宮家の女に求婚した世の男たちは知らないに違いない。自分が好きになった相手が、あるいは求婚した相手が、実は世にもおぞましい妖蟲たちを相手に、夜な夜な性の狂宴に励み、乱れ狂っていることを。しかもその性宴は、千年以上の永きに渡って続いており、いまもなお継続中であるのだった。

蟲宮響子という少女がいる。平成の半ばに蟲宮家本家筋に生まれた女性で、美しいだけでなく、非情に聡明で頭もよく、名門校として知られる私立宇佐美学園では生徒会長を務めていたことでも知られている人物だ。

彼女は美しいだけでなく、肉体的にも魅力的な女性であって、日本人離れした大きな乳房や臀部、それに振りまく色香は、学生・教師を問わず学園中の男たちを魅了し、蠱惑してやまなかつた。一説によると、在学中に彼女が受け取ったラブレターの数は数百通に及ぶとされ、そのなかには他校の生徒から送られてきた物もあったという。当然のことながら、告白を受けた回数も多く、週に一回は誰かしらから交際を申し込まれていたというから驚きだ。しかし、蟲宮響子が特定の何者かと付き合うことはなく、そのため、彼女を神聖視した一部の生徒が秘密裡に結成したファンクラブは、まるで宗教のような団体と化し、彼女に近づく異性たちを物理的に袋叩きにするという事案まで発生するほどであった。

男子たちの前を彼らの崇敬の的である蟲宮響子が通り過ぎたならば、男たちは鼻の下を伸ばして声を潜めて語り合ったものである。

「ああ、響子先輩は今日も綺麗だなあ」

「まったくだ。あの人をひと目見ただけで、今日一日、やる気と元気がみなぎってくる」

「うんうん、まったく、同感だ」

「しっかし、いつ見ても大きいよなあ。あの胸、あの尻。くうう、たまんねえくなあ」

「おい、そんなこと言っていると、ファンクラブの連中にボコボコにされるぞ。「不敬だッ！」ってな」

「でもよお、実際、たまんねえだろう。響子先輩のあの胸ッ、形も良いし、ハリも良いし、なによりでかいんだぜ。それこそ大玉のスイカみたいにさ。うううう、一度で良いから、揉んでみてえなあ」

「いや、胸だけじゃないぞ。お尻だってプリッぷりだ。むしろぶりついて、割れ目に顔を埋めたら、それだけイッチちまいそうだと思うぜ」

「なんだよ、やっぱりおまえも先輩のことそんな目で見てんじゃねーか」

「うるせーし。いいじゃねーか、別に、想像するくらい。どうせ俺たちなんか、指一本触れることさえできねーんだからよ」

「まったくだ。しかしよ、先輩、誰かと付き合ってたりのかな。そんな話、聞いたことねーけど」

「ファンクラブの奴らから聞いた話だと、まだ誰とも付き合っていないって話だぜ」

「だとすると……：……処女!？」

「たぶんな。でも、俺たちには関係ない話だよ。どうせ指一本触れることができないんだからさ」

「そうだよなあ。あくあ、先輩、誰と付き合うのかなあ。いいなあ、その付き合いえる奴。きつと、先輩の身体を好きだけ弄れるんだろなあ。あくあ、羨ましいなあ」

と。学園では、蟲宮響子を目にした男子生徒たちが、いたる各所でそのような妄想を語っているのだが、彼らは決して知らないだろう。彼らが神聖視する蟲宮響子が、実はすでに処女などではなく、奇怪でおぞましい生命体たちと、夜な夜な性の饗宴で乱れ狂っていることを。しかも、穴という穴を蹂躪し尽されているだけでなく、すでに穴という穴で、人ではない子どもを、何千匹・何万匹も産み孕んでいるということ。

………続きは本編でお愉しみください。